

待ち焦がれたハッピーエンド

序章

「女優志望？」

「なにか問題でも？」

成瀬美紅は精一杯の愛想笑いをした。

さすがに秘書面接で女優志望はまらなかった？

「いや、問題ない。むしろ好都合だ」

重厚なプレジデントデスクについた紳士は、美紅の履歴書を見ながら質問を続ける。

「二十二歳、現在無職か。秘書の業務経験は？」

「三年です。スケジュール管理や文書作成といった基本的なことはマスターしています」

「十歳のとき母親がアメリカ人と再婚。それで渡米してきたと」

いかにも高級そうなダークスーツに身を包んだ紳士は、黒い革張りの椅子にもたれ、長い指で履歴書をめくった。紳士のブロンス色の髪は櫛で丁寧に梳かされ艶めいており、鼻梁はギリシャ彫刻のように高い。エキゾチックな美形だが、日本人に見えなくもない。その声は低く、事務的で、感情らしきものは読み取れない。

彼の質問は淡々と続く。

「女優を目指したきっかけは？」

「はい。初めてブロードウェイミュージカルを観たとき、すっごいドキドキワクワクしたんです。本当に夢のようで、素晴らしくて」

美紅は当時の感動を思い出し、目を輝かせた。思わず声が大きくなってしまった。

「私にはもうこれしかないって思ったんです。どんな方法を使っても、この舞台に立つてみるって！」

「それでニューヨークに？」

なんの感動も示さないまま、紳士は言った。長い睫毛に囲まれたグレーの瞳は、無機質で冷たい。それでも美紅は怯まず元氣よく質問に答える。

「はい！ パートタイムで働きながらアクターズスクールの講座を受けています」

「特技は、シヨーギシアツ……？」

「将棋と指圧です。日本で習いました」

「ふむ。家族は？」

「実父が私が七歳のときに、母は三年前に亡くなりました。二歳年上の姉がいますが、日本の祖母のところまで暮らしています」

「再婚したお父さんは？」

「アメリカに移住してすぐ離婚したので、今はどこでなにをしてるか。継父とは、もともとそんな

に仲良くなかったですし」

「……なるほどね」

紳士は涼しげな目をすつとこちらに向けた。

そのクールな視線に美紅はドキリとする。

うわっ……。すごっ。雑誌で見るより断然イケメン。しかも超セクシー！

眼前の美麗な紳士は、日系ドイツ人のディーター・アウグスト・キタヤマ、二十八歳。ソフトウェア会社のCEO——最高経営責任者でIT業界の革命児と呼ばれている。父親は世界的自動車メーカー・キタヤマグループの創業者だ。ディーターは十代で起業したこの会社を、切れ過ぎる頭脳と強引な買収で世界規模に拡大させた。利益のためには手段を選ばない、冷酷非道な野心家として知られている。ゴシップ誌によると女優やセレブと浮き名を流すも、特定の恋人は作らない独身プレイボーイらしい。

「国籍は？ パスポートは持つてるね？」

言いながらディーターは氷のような視線を履歴書に戻した。

美紅は改めてディーターを観察した。抜群に洗練された、他を圧するオーラ。精神と肉体が成熟した男だけがまとう静謐な色気。これは只者じゃないぞ、と美紅は評する。

いっぼう、本日の美紅は完全に面接仕様だ。栗色のロングヘアをひつつめ、丸めてお団子にしている。髪が多いせいか大きな玉ねぎが脳天に載っているみたいに見える。親友のステファニーから借りたブカブカのねずみ色スーツを着込み、近眼のため大きな眼鏡を掛けている。肌は白く、

ぱつちり二重の瞳は琥珀色だ。日本人にしては色素が薄いほうだろう。そばかすの散った鼻の下にある、厚めの唇が色つばいと褒めてくれる人もいるが、美紅自身は気に入っていない。

ここはニューヨークのウォール街にあるIT会社『グレイルソフト』のオフィスビル最上階。秘書の求人に応募した美紅は最終面接を受けている真つ最中だ。プレジデントデスクの正面に置かれたスツールに美紅は腰掛けている。ディーターの背後は全面ガラス張りで、眼前にマンハッタンの迫力ある摩天楼が広がっている。

この部屋の内装は一流企業の役員室にふさわしくシックだ。デスクやソファは流線型、照明とコーヒーターブルは惑星や宇宙船を模した形で、まさにニューヨーク最先端のデザインという感じ。壁には大きく引き伸ばされた深海の写真が飾られている。

もしかして海が好きなのかしら？ と美紅は想像する。

「ミス成瀬？ 国籍とパスポートは？」

「はっ！ すみませんっ！」

美紅は我に返った。やばいやばい。面接中だった！ ポーっとしている場合じゃない。

「国籍はアメリカです。パスポートの有効期限はあと五年ぐらあります」

「独身か？」

「はい」

「恋人は？」

「……失礼？」

まさかビジネスの場でプライベートな質問をされると思わなかった美紅は聞き返す。

「恋人はいるのかと聞いているんだ」

「プライベートに関して答える必要はないと思いますが？」

「必要があるから聞いているんだ、ミス成瀬」

ディーターは答えを促すように大きな手を美紅のほうへ差し出した。上流階級の紳士らしく、手入れが行き届いておりつるりとしている。ディーターは苛立ったように声を大きくした。

「時間が惜しい。答えてくれないか」

「いません、が」

「好きな人は？」

「いません！」

「身長は？」

「一六〇センチです」

「スリーサイズは？」

「は？」

「ミス成瀬。何度も同じことを言わせなくてくれ」

ディーターは指先でデスクをトントン叩く。しかも早く答えろと美紅を睨んでいる。

美紅は啞然とした。なんなの？ セクハラ？ 面接でスリーサイズを聞くとか有り得ないんですけど。

「質問に答えたまえ」

ディーターは眉一つ動かさず、冷淡に命令した。答えないなら、とつとど帰れと言わんばかりだ。美紅はなかばヤケクソでスリーサイズを申告し、嫌味をつけ加えた。

「スリーサイズで合否を決めるなんて素晴らしい会社ですね」

「合否には関係ない。準備に必要な情報だから聞いたまでだ」

「準備ですって？」

「今、質問しているのは僕だ。まずは僕の質問にすべて答えてくれないか」

ディーターはあくまで冷徹だ。失礼な質問の連続に、美紅はだんだん不満が募ってくる。

「君はコンピューターソフトの研究開発の経験はあるか？」

「いいえ。ひとつつも」

「では、興味は？」

「ぜんぜん興味ありません。これっぽっちも！」

美紅はつい声を荒らげてしまう。ディーターは少し呆気にとられながら美紅を見た。美紅は威嚇して睨み返す。

「最後に。ミス成瀬、君はすべての質問に正直に答えただろうか？」

「ええ、もちろんです。ミスターキタヤマ」

美紅は鼻息荒く返事をする。なんだか無性に腹が立ってきた。

「……いいだろう。君は合格だ」

「は？」

いったい今のやりとりのどこがお眼鏡にかなったの？

「仕事内容はアロン・スミスから聞いているね？」

アロン・スミスとはディーターの秘書のことだ。一次面接の面接官はアロンだった。ディーターと同年代の美形な男。彼が推してくれたおかげで、この最終面接まで辿り着いた。

「はい、少しだけ。なにか特殊な任務があると聞きました」

「実は秘書というのは名目上のものですね。実際の任務は別にあるんだ」

「名目上？」

「結論から言おう。君には期間限定で僕のフィアンセになってもらう」

「へ？」

「エーゲ海の島で二週間、僕の一族に会ってフィアンセ役を演じて欲しい」

なにになになに？ なんだって？ 今、なんて言った？ 展開についていけず、美紅はポカンと口を開けた。

そんな美紅には構わず、ディーターはビジネスライクに説明を続けていく。

「と言っても、別に特別なことをしてほしいわけじゃない。君は自由に休暇を楽しんでくれればいい。必要なものはこちらですべて用意する。それから、なんでも好きなものを買ってくれて構わない。もちろん、すべての費用は僕が持つ」

ディーターは顔色一つ変えずそう言った。

美紅は馬鹿みたいに口を開けたまま、ディーターの唇を見つめた。

「実は従妹のアレクシアと結婚させられそうになっている」

ディーターは芝居がかった様子で悲愴な表情を作ると、ピアニストのように長く繊細そうな指を組んだ。

「アレクシアの父親がヨーロッパの小国の王族でね。ちょっとした利権がらみだ。従妹とは子供の頃からのつき合いで妹みたいなものだし、彼女には愛する恋人がいる。それに僕は誰とも家庭を持つ気はない。だが、両家の両親はもちろんのこと一族全員が僕たちを結婚させようと画策している。そこで僕がフィアンセを紹介すれば彼らも諦めるだろうという計画だ。フィアンセを演じるだけで君の経歴に傷はつけない。安心してくれ」

「ちょっとよつちよつと、ちょっと待ったああー！」

美紅は腕をまっすぐ伸ばし、手のひらを広げてSTOPと叫ぶ。

「なに勝手に話を進めてんですか？ 私、このお仕事を引き受けるなんて、ひとつことも言っていないですけど？」

「報酬は最初に提示した額の十倍払う」

ディーターは切れ長の目を細め、すつと人差し指を一本立てた。微かに口角を上げ、さらりと報酬を上げてくる。

「それに加えて、ミッションクリア後にさらに同額。ついでに、君が住まいを探していると聞いてマンションも買い上げた。契約終了時までに住めるよう準備を整えておく」

「なんですって？ 報酬二十倍な上、さらにマンションまで！」

美紅の目は一瞬でドルマークになる。実は今、美紅は人生のどん底にいる。勤めていた会社を解雇され職もない。家賃滞納で家も失う寸前。恋人もいない。そんな明日をも知れぬ身だ。女優になる夢はあるけど、夢だけじゃ生きていけない。この面接に落ちたらホームレス支援センター行き。

正直、この報酬は破格だ。

ディーターは値踏みするようにこちらを見ている。指先から髪の毛一本一本まで、視線がじわじわ這ってゆく。まるで裸にされているよう、と美紅は思う。

「女優になりたいなら、レッスン料や衣装代など、いろいろ物入りだろうね。これはあくまで契約だ。たった二週間、形ばかりの婚約をするだけで僕は面倒な政略結婚を免れる。君は住まいと小切手を手に入れる。すべてが終われば元通り。悪い条件じゃないと思うが？」

確かに悪い話じゃなさそうだ。美紅は懸命に頭を働かせる。婚約者を演じるのは、演技の勉強にもなるわよね？ 現金は喉から手が出るほど欲しい。でも……

「なぜ私なんですか？ ふさわしい人が他にいっぱいいるんじゃない？」

「女性に不自由はしていないが、適任者は君しかいないんだよ。あくまでビジネスライクに契約を履行し、後腐れなく関係を終わらせることが肝要だ。勘違いして期待されても困るし、どこかのあはずれを雇って脅迫まがいのことをされても面倒なんでね」

なるほど。あなたと寝た女は、皆、あなたに結婚を迫るといっわけね。で、あなたにはその気がないと。

「要は、愛人になれってことなんですか？」

「勘違いしないでくれ。僕が買うのはあくまで君の時間であって、体じゃない。セックスは一切なし。君のタスクは二週間着飾って僕の隣でニコニコしていることだ。後でアーロンと契約書類を承認してくれ。そう明記しておいた」

「報酬は必ず頂けるんですね？」

「無論だ。額が不足なら言ってくれ。君の働きによっては特別ボーナスも出そう。それから今日、契約書類と一緒に前金を支払う」

「……わかりました。この話、お受けします」

美紅は札束の前にひれ伏した。それはもうパーフェクトで完膚なきまでに深々と頭を垂れた。嗚呼、札束様。

——これも生活のためよ。かなり怪しい契約だけど、背に腹はかえられない。ご飯を食べて眠らなきゃ生きていけないんだから。よくよく考えたらこんな上流階級のイケメンが、私みたいな貧乏小娘をどうこうするわけないし。となれば、これはかなり美味しい。美味しいすぎる!! 報酬を全部もらえば向こう十年はトレーニングに集中できる。それに、今とくに力を入れているダンスレッスンだっけ受け放題だ。夢みたい」

「結構。では、よろしく。ミス成瀬」

ディーターは立ち上がり、こちらへ歩いてきて手を差し出した。身長は一八〇センチ以上あるだろう。がっしりした広い肩幅に頑強な体。かなり本格的に鍛えてそう。

美紅も握手に応えるべく、すつくと立ち上がる。そしてディーターを見上げ、営業スマイルで手を差し出した。

「こちらこそ、よろしくお願いします。ミスターキタヤマ」

ディーターの手を握った瞬間、指先から全身にピリッと刺激が走った。

あっ……なに、これ。

ディーターの手は冷たく滑らかだった。手を離すのが名残惜しいくらい。微かに美紅の体は疼いた。ディーターも少し驚いたように自分の右手を見ている。

もつとあの手に触れて欲しい……

そう思いながら美紅が見ていると、ディーターはふいと横を向いた。美紅はハッと我に返る。

やばっ。なに考えてるの？ やばすぎ。欲求不満すぎ。ここはオフィスだっけ！

「どうした？」

「いえ、なんでもありません」

美紅は慌てて汗ばんだ手のひらをジャケットの裾で拭いた。——ちよつと私、なんか変かも。もつと触れて欲しいと思うなんて。

「出発は一か月後だ。これから向こう半年間は僕以外の男との関係は控えてくれ。申し訳ないがこれも契約の一つだ。僕も君以外の女性との関係は一切断つ。お互いクリーンな状態で計画を進めたい」

「了解しました。ミスターキタヤマ」

「フィアンセはファーストネームで呼び合うのが普通だ。僕のことはディーターと呼んでくれ」
ディーターは自らの顎に手を当て、ゾツとする目をした。

「契約違反には重大なペナルティを科す。もし僕に嘘を吐いたり、裏切ったりしたらどうなるか、わかるね？」

社会から追放され、地獄の果てまで追い回され、骨の髄までしゃぶられるんですね。まさに蛇に睨まれた蛙とはこのことだ。ディーターがちらりと視線を動かしただけで、空気が凍結する。

「わかってはいるつもりです」

言いながら美紅は、少しずつ不安になってきた。私がいかにすごい人の婚約者役？ 本当に？

「私で大丈夫かしら。フィアンセを演じるって、他にどんなことをすればいいんでしょう？」

「細かい内容はアーロンに確認してくれ。契約書類にもやるべきことがすべて書いてある。君はそれに従って行動するだけでいい。心配ない。僕とアーロンが全力でサポートする」

「ご期待に添えるよう努力します。ディーター」

「最後に一つ重要なルールを言っておく」

「なんでしよう？」

ディーターは少しまぶたを伏せ、怖いほど冷たくこう言った。

「絶対、僕を好きになるな」

第一章 まさか私が契約婚約!?

「絶対、僕を好きになるな」

美紅は半眼になりながら、ディーターの声を真似して言った。

「ですって！ 信じられる？ どんだけ上から目線なの!？」

自室のベッドに座った美紅はクッションを力任せに投げた。それは壁に貼られたミュージカルのポスターに当たって落ちる。

「信じられないところは、もつと他にあるでしょ」

ステファニーはフォークでトマト味のヌードルをつつきながら、笑ってツッコむ。

「秘書面接からの偽装婚約にリゾート、さらに好きなもの買い放題……ロマンス小説のテンプレを全部ぶっ込んだみたいなお展開ね」

ステファニーは仕事帰りにファーストフードを買ってきては、美紅の家で食べるのが常だ。ちぢれウエーブのかかったボリュウムある赤毛を束ね、赤いフレームのメガネをかけている。男物のよれよれシャツに擦り切れたダメージジーンズという姿は、さながらストリートアーティストといった出で立ちだ。実際は不動産会社の事務をやっている。美紅とはハイスクール時代の同級生だ。卒業して一旦離ればなれになったが、マンハッタンでばったり再会した。以来、ステファニーの職場か

ら近いという理由で週に三日はこの部屋に入り浸っている。

「こだけテンプレが広く知られてたら一回ぐらい現実起こってもおかしくないでしょ」

と美紅は言う。

今日の美紅は髪を下ろし、メイクもしていない。デカデカとロゴの入った白いパーカーを着て、下はスウェットのズボンをはいている。そうしてひさしぶりにやってきたステファニーに先週の面接の顛末を報告していたのである。

「ま、そうよね。これは現実だもんね」

ステファニーは眼鏡のフレームをぐいっと押し上げ、感心したように言葉を続ける。

「それにしても、僕を好きになるな……つてすごい台詞ね。その一言が森羅万象を表現してるわ。

一周回って笑えてくる。ただしイケメンに限る、みたいな」

「けっ。イケメンだからだよ。何様だっつーの」

「事実じゃん。かたや、モテモテイケメンスーパーエリート大富豪。かたや、職なし彼なしの冴えない貧乏女優。上下で言えば、あんたが下でしょうが」

そこまではつきり言われたら言い返せないんですけど、と美紅は恨みがましくステファニーを睨んだ。

「けどさ、あんたは秘書の採用に応募したんでしょ？ 実は偽装婚約の片棒を担ぐ仕事でしたって詐欺みたいな話ね」

そう言うステファニーはモデルを一気に啜り上げ、スープと一緒に呑み込んだ。

「報酬が破格なのよ！ 私も最初はその場を去ろうと思ったけどさ、金額が私の年収を余裕で超えてたわけ」

「ふーん。それで動けなかったんだ。金に釣られて？」

「そうよ。だって金が必要なんだもん」

ここはダウンタウンにある美紅の狭いフラット。ダウンタウンと言えば聞こえはいいが、その実チャイナタウンの外れにある低所得者用の集合住宅だ。美紅の部屋は1Kでたった六畳しかなく、シングルベッドと小さなチェスト、さらにデスクを置いたらもう足の踏み場がない。部屋は「日本式」を採用し、入室の際は靴を脱ぐことにしている。ステファニーは靴を脱ぐたびに「めんどくさいな」とブツブツ文句を言う。それでも裸足で過ごすのはお気に入りらしく、ベッドとデスクの間に長い足を折って座り込んでいる。築三十年以上経つ建物は老朽化が進み、あちこちタイルは剥がれ、換気扇にはカビが生え、排水は最悪だ。しかも月末までに家賃を払わなければ出ていかざるをえない。

「嘘だね。金だけじゃないでしょ。気に入ったんでしょ？ その男のこと。もしかして惚れちゃった？」

ステファニーは目をゼリービーンズみたいな形にしてニヤニヤした。

「バツ……馬鹿言わないでよっ！ お金よお金。それ以外なにもない。雇い主相手に恋愛とか、絶対ないない」

「あーら。男女が恋に落ちるのに理由はいらないって。運命のお相手なんてひと目見りゃわかるん

だから」

ステファニーは自信たっぷりに言う。そうして美紅の目をじっと覗き込むと、さらにこう言い聞かせた。

「けど、相手を選びなね。あんたが傷ついている姿を見たくないし」

「やっぱ断ったほうがいいかな？ この仕事」

「あたしやオイシイ仕事だと思うけど？ あんた、貯金が一ドルもないんでしょ？ 後がないんでしょ？」

「ないわよ。だから引き受けたんだもの。こうなりや婚約者でもママでもスーパーヒーローでも演じてやるわ」

「その意気よ！ しかも成功報酬でマンションつきでしょ？ 乗らない手はない！ この狭いフラットで晩御飯食べんの、いい加減うんざりなんだから」

「私だって、ステフが座るだけで足の踏み場もなくなるフラットはもう勘弁。ビシッとミッシェンクリアして、広いお部屋に住むんだから」

「いいい？ 美紅。ここはマンハッタンなの。アメリカンドリームのメッカなのよ？ こんなチャンス二度とないよ！」

「そう言うと思ったわ、ステフ。よし、いっちょう気合い入れて頑張るか！」

「けどさ、その雇い主ってかなりいい男なんですよ？」

言いながらステファニーはキャンバス地のバッグから雑誌を取り出ししてみせた。『Celeb☆

Star』と奇抜なロゴが入ったニュー Yorker 御用達のゴシップ誌だ。最速でスクープをものにすることで有名である。

「ほらほら見てよ。今週号。あんたの雇い主が載ってたから買ってきちゃった」

よく見ると、有名女優の腰に腕を回したディーターの姿が表紙を飾っていた。相変わらず感情の薄いクールな顔。エレガントなディナージャケットを着て、気取った様子でエスコートしている。

写真じゃ全然伝わってこないわね、あの超強烈なオーラが。周囲を圧倒する存在感。実物のほうが、もっとずっとすごいんだから。

「美紅、あんたデレデレしてるよ」

ステファニーが肘で美紅の脇腹をつついた。

「ちょっと、やめてよ。そりゃあ確かに頭がよくて金も持つてるかもしれないけどさ。背も高くても整っててイイ体してるけどさ。声も甘くて唇もセクシーで、目ヂカラがはんばないって言うか」

「ほーほーほー」

ステファニーは、したり顔でニヤニヤする。ディーターのグラビアをうっとり眺めていた美紅は、はつと我に返った。

「とにかく性格が最悪なんだって！ 傲慢で自信家で上から目線。私なんて完全に見下されてるもん」

「またまたあ！ そいつのこと意識してんのがバレバレですよ？」

「別に。単に契約したってだけよ。面接の日以来、会ってないし」

ディーターに会ったのはあの面接が最初で最後だ。あれ以来、すべて秘書のアーロン経由でやり取りしている。VIPには、そうそう簡単に会えないらしい。

「そうなんだ。エーゲ海に行くまでフィアンセ殿に一度も会わないの？」

「ううん。一回会う予定。明後日の夜に打ち合わせを兼ねてディナーに行くの」

「ディナー？ どこどこ？」

「知らない。イースト・ビレッジにあるカジュアルなお店って言うってだけど……」

「しかし、あなたに務まんのかね？ あんなゴージャスな男のフィアンセ役なんてさ」

「それは大丈夫。ディーターの第一秘書のアーロンって人が全部サポートしてくれるから」

「あ！ さつき玄関で会った優男か！ とびきりハイスベックじゃん。ブロンドの長髪で、いかにもプレイボーイって感じ」

「確かに格好いいけど誠実な人よ。ディーターとは正反対のタイプ。ディーターが陰ならアーロンは陽で、ディーターが剛ならアーロンは柔みたいな」

「へー。あんなセクシーな男と四六時中一緒にいられるなんて羨ましいわ」

「四六時中つかか、朝九時に迎えに来られて、ブティック回って服買いまくって、遅くまであちこちのサロンに連れ回されるだけよ」

美紅は思い出さずうんざりした。面接の翌日はエステサロンに強制連行。ヘッドスパにフェイシャルケアにボディケア。全身脱毛してマッサージ。おかげで肌は生まれたての赤ん坊みたいにつ

るつるだ。それから眼鏡もコンタクトに変えさせられ、ヘアサロンにネイルサロンにメイクスタジオと引つ張り回された。体中いじくられ、ほうほうのていで帰宅。これが毎日出国の日まで続く。

「これぞロマンスの王道。『マイ・フェア・レディ』ね。ただし、主演女優は売れない冴えない貧乏小娘だけど」

三度の飯よりロマンス小説を愛するステファニーは夢見るように言った。学生の頃からロマンス小説ばかり読み、ロマンス小説家を目指して暇さえあれば原稿を書いている。そんなステファニーを美紅は「ロマンス脳」と呼んでいた。

「貧乏小娘とは失礼な」

美紅はブツブツ言った。

「さつきのは冗談として、あなた綺麗になったよ。その髪型、似合ってる。あのひつつめオニオンヘアより断然いいわ」

ステファニーは美紅の緩い巻き髪を褒めた。長年手入れもせずにボサボサだった髪が、今やしつとり艶やかになっている。

「これね、ミッドタウンにあるヘアサロンのトップスタイリストにやってもらったの」

「報酬は破格。タダでサロン行きまくり。毎日、金髪美青年にハイヤーで送迎されて、至れりつくせりじゃん」

「ほんとはね。後がないから気合い入れてやるわ。それに、楽しいこともあるし。今日なんて五番街のブティックに行ったの！」

「わお！ 五番街！ うちらには一生縁がない場所ね。並んでるお店は、一流どころばっかりじゃん！」

「そうなの！ そしたらね、なんとブティックが貸し切りで私専用のビューティーアドバイザーまでいたのよ！ すごいでしょ？」

「出た！ 貸し切り。さすがIT業界の帝王は、やるのが違うわ」

「もう袖を通すのも勿体ないドレスを山ほど買ったの！ いつもの古着屋で買うワンピースと桁が違ったわよ！ 全部デザイナー持ちで。ステフにも見せたかったなあ」

「いいなあ。あたしも見たかったわ。夢があるう。あんた、ダンスやってみっちゃんスタイルいいから似合うと思うわ」

「面接るときにスリーサイズ聞かれてさ、そんなときはハアアア？ って思ったんだけど、このためだったのよね」

「ただのセクハラじゃなかったわけだ」

「そうなの。しかもビューティーアドバイザーってすごい。髪とか瞳の色を見て、あつという間に似合うドレスをチョイスしてくれるんだもん」

「けどさーあんた、フィアンセを演じるってどこまでやるの？ まさか夜のお勤めもあるの？」

「大丈夫大丈夫！ そこはキッチリ確認したから」

美紅は言いながらバッグから封筒を取り出す。契約書を抜き出すとペラペラめくり、該当箇所を指差してみせた。

「ほら、ここ。セックスはしないって、ちゃんと書いてあんの」

「とかなんとか言っちゃってえ！ リゾートへフィアンセとして行くんでしょ？」

ステファニーは美紅の肩に腕を回して言う。

「これはビッグチャンスよ！ 美紅！」

「チャンスって？ な、なにが？」

ステファニーは美紅の耳元に口を寄せて、こうささやいた。

「ロ・ス・ト・バー・ジン」

美紅は、ぼつたりとクッションの上に倒れ込んだ。

「いいじゃない、いいじゃない！ プレイボーイの誉れ高い、イケメンエリート大富豪！ 相手にとって不足なし！ 一流テクニクも期待できそうよ。こうなりや強引にでも一戦交えなさいよ！」

「ないないない！ セックスは契約違反なもの。違約金十萬ドルも払えないし」

「馬鹿ねえ。契約なんて双方の合意があれば、なんともなんのよ。男と女を前に契約なんて無意味」

デザイナーを相手にロストバージン！ 想像しただけで美紅は目が眩んだ。あのたくましい体に包まれたら、どんな感じがするんだろう？ デ자이너の舌や指が敏感なところに触れるかと思うと、美紅の体は火照った。

「ダメダメダメ。やばいやばい。無理無理」

「社長がダメなら、アーロンって男に頼んだら？ 最初は、ああいう人に手ほどきしてもらおうとい

いわよ。あちらさんも相当なもんでしょ」

確かにアーロンは物腰柔らかかで優しい。女性の扱いにも慣れてるし、こちらも気後れしない。ディーターを前にしたときのような緊張感はない。

けど、アーロンは男性として見れないな。

瞬時にそう思ってしまったことが不思議だった。アーロンもイケメンなのに、ときめかない。ディーターに対する、あの一気に体温が上昇する感じは一切ない。

「いやいやいや。ないから。絶対ないから。私みたいな女は、ああいうエリート達には相手にされないって」

「妄想するだけならタダじゃん。で、どうなの？ あんた、どっちがいいの？」

「私は……やっぱ、するならディーターのほうがいいかな」

「ちよっと、なにあんた赤くなってるのー？ やだー！ 聞いてるこっちが恥ずかしー」

「やめてよ！ 仮定の話でしょ？ それにディーターからは好きになるなって釘を刺されてんだから」

「くだらない。そんなの無視無視。あんたもう二十二でしょ？」

「う。私だって別に好きでバージンなわけじゃないわよ」

「いい？ チャンスは体で感じるのよ。理性や論理ではなく、本能を信じるの。時がきたら第六感が教えてくれるから」

ステファニーは、ぐつと顔を寄せてこう言った。

「そして、今だ！ と思つたら、冷静かつ大胆に行動すること」



この場所には明らかに場違いな黒塗りのリムジンが目に入った瞬間、美紅は思わず背筋を伸ばした。

ここは、マンハッタン橋にほど近い、美紅のフラットがある少々治安の悪い地域。立ち並ぶ老朽化したビルやシャッターは下り、人気はなく静まりかえっている。街路灯に照らされた美紅の影だけが、ひび割れたアスファルトに伸びていた。六月も終わりだというのに珍しく涼しい夜で、美紅は微かに身震いした。今夜はディーターと会食をする約束で、美紅は迎えを待っている。

滑るようにリムジンがやってきて目の前で停車した。ピカピカに磨かれた車体にドレスアップした美紅が映る。制服を着たドライバーが降りてきて、恭しくドアが開けられた。

車内にタキシード姿のディーターが見え、それがあまりにスタイリッシュで、美紅は一瞬ひるむ。「手を……」

言いながら目線を上げたディーターは、美紅の姿を見てしばし沈黙した。

今夜の美紅はバーフェクトにドレスアップしていた。眼鏡を外し、髪をアップにし、腿までスリットの入った紺青のドレスをまとっている。鎖骨は完全に露出し、そこに手入れた巻き髪がふわりとかかっていた。ドレスがタイトで胸の谷間までくつきり出ているのが、美紅は気恥ずかし

かった。ウエストをぎちぎちに締められているおかげで、きゅっとしたくびれができています。元々色白なほうだけど、ドレスの深い青がいつもより肌の白さを引き立てている気がした。

どう？ だぶだぶの野暮やぼりたいスーツを着た玉ねぎは大変身したでしょ？ と美紅は自信満々である。

ディーターは言葉を失ったまま、熱っぽい眼差まざせしでこちらを見つめている。

このとき、美紅はディーターの磁場じばに引きずり込まれるような、強い引力を感じた。その刹那せつな、自分がなにをここにへ来て、相手が何者かさえ忘れていた。

しばらく、美紅は不思議な磁力を感じながら、ディーターをぼんやり見つめていた。

先に立ち直ったのはディーターだった。即座にビジネスモードの仮面かぶを被り、さっと手を出し美紅をエスコートする。

「お嬢さん、お手を」

言われるがままに手を取り、美紅はリムジンに乗り込む。そこには目を見張るほどセレブな空間が広がっていた。

うわあ〜すつごい！ 美紅は思わず両手で口を押さえた。お洒落しゃれなバーみたい！ こんなの映画の中だけだと思ってたけど、現実にあるのね……

車内はゆったりとしたスペースで、ベージュを基調としている。革張りのロングシートは優美な曲線を描き、バーカウンターにはシャンパンやカクテルも用意されていた。

美紅が車内を見回しているうちにリムジンは音もなくアレン・ストリートを北へ走り始める。

「おひさしぶりです。ディーター」

「やあ、美紅」

ディーターはどこかぼんやり美紅の唇の辺りを見つめたまま答えた。

今夜の彼は気品あるディナージャケットを羽織はねり、シャープなナロータイを結んでいる。鍛えられた足はスーツに包まれ、黒い革靴は光沢を放っていた。重々しかりがちなフォーマルスーツも、タイとシャツの組み合わせで軽やかに着こなしている。まさにニューヨークのトップに君臨くんりんするビジネスマンといったコーディネートだ。

美紅が足を組むと、ディーターの視線は深いスリットからのぞく白い太腿ふとももの辺りをさまよった。

「これ、どう？ あちこち引きずり回されて、改造させられたんだけど」

ディーターの不躰ぶていな視線に少し照れながら、美紅は言った。

「いや……綺麗きれいだ。むしろぶりつきたくなるというのは、このことだな」

彼が本気で言ったように思え、美紅は恥はずかしくなって顔を伏ふせた。

ちよつとちよつと。これぐらいでうるたえてちゃダメだって！ こんなの、プレイボーイしよっボーイの常套じょうたう句くなんだから。

「君がこの仕事を引き受けてくれて感謝しているよ」

ディーターが微笑ほほかに笑いながら言った。彼の低音は腹が立つほど耳に心地よい。

「感謝するのはこつちよ。一銭いっせんも払わず体中ピカピカにしてもらった上に、こんなすごい車に乗れるなんて。もつとも、この後なにが起こるかかわかんないけど」

「なにが起るかわからない……いいね。僕を誘惑するとか？」

美紅は目を見開いて嘖然とした。これだからモテる男は！

「あつきれた。どんだけ自信家なの？ 自分を誘惑しない女は、この世に存在しないかと思うそう」

「これまでの経験を踏まえて言っているだけだ」

「そういうのをイタイ奴って言うのよ。ああ、あなたみたいな自意識過剰な人の婚約者を演じなきゃいけないなんて気が滅入るわ」

「珍しいな。大抵の女性は尻尾を振って引き受けてくれるが」

「でしようね。あなたの富と名声にたかってくるんですよ。蛍光灯に群がる蛾みたいに」

「ディーターは心外だと言わんばかりに片眉を吊り上げた。

「どうやら僕は知らない間に随分と嫌われたらしいね。君に失礼なことをしたのなら謝罪するよ、美紅。しかし、そんなに嫌な相手のフィアンセ役を、なぜ君は引き受けたんだろうか」

「ふん。引き受けた理由なんて一つに決まっているでしょ！」

美紅は彼を睨みつけ、人差し指と親指を擦り合わせるジェスチャーをした。

「お金よ！」

「明快だな」

「当たり前でしょ。それ以外に理由があるとも思っただの？ 自惚れんのもいい加減にして」

「それでいい。前も言ったが、変な下心を持たれたら困るからな」

「悪いけど、それはこちらの台詞よ。リッチだからって下心がないとは限らない。むしろ、歪んだ欲望を抱えてそうなもの」

ディーターはフツと鼻で笑うと、シートに深くもたれ、長い足を組んだ。

「笑わせてくれるな。女には不自由していない。僕は『マンハッタンで結婚したい独身男性ナンバー1』に選ばれたんだぞ」

笑わせてくれるのはどっちよ！ と美紅は内心ツツコんだ。得意気に胸を張る彼は、まるで駆けっこで一等賞を取った子供のようで、ついニヤけてしまう。

どこが冷酷非道な野心家なのよ。可愛いところあるじゃない。

「不安な気持ちはわかる。僕も偽装婚約なんて初めての経験だ。だが、お互い協力すればきっとトラブルなく終わると信じている」

美紅の様子にまったく気づかずディーターは言った。美紅は込み上げる笑いをなんとか呑み込み、こう返す。

「私だってトラブルなく終わらせたい。任務を遂行して、綺麗な体でアパートに帰りたい」

「ならば僕は同じ思いだ。僕だって綺麗な体のままマンハッタンのオフィスに帰りたい。そのために最大の努力はするよ。だから毛を逆立てた子猫みたいに威嚇しないでくれ」

「別に威嚇なんてしてないし。……それにしても無駄に広い車ね。いつもこんな車で移動してるの？」

「いや、今夜は特別だ。少し呑むつもりだから。普段の移動は自分で運転している」

「へえ。車の免許なんて持ってるんだ？」

「当たり前だろう？ 僕をなんだと思ってるんだ」

「ごめんなさい。部下に運転させて後部座席でふんぞり返っているお坊ちゃんかと思っただの」
「ディーターの片眉がぴくりと動く。どうやら今の言葉は、彼のプライドに障ったらしい。」

「基本的に自分のことは自分でやる。もつとも、忙しいときは他人の手を借りることもあるが」

「ディーターは横目でジロリと美紅を睨んだ。その刺すような視線は面接のときと同じだ。
「そもそも僕が運転手を雇おうが後部座席でふんぞり返ろうが、君には関係ない。給料は払っているし、法律違反もしていないんだから」

「なによムキになっちゃって、と美紅は思う。少しでも見下されたら猛反撃してくるなんて、よっぽどプライドが高いのね。でも、少し子供っぽいけれど、それが彼の魅力の一つなのかも、と美紅は分析した。」

「ディーターは軽くため息を吐き、ドアに肘をかけて頬杖をついた。窓の外には、きらびやかなビルが灯りが近づいては去ってゆく。十九時過ぎのアレン・ストリートは仕事を終えた人々が行き交い、少し渋滞していた。」

「美紅がシートに座り直すと、左手が彼の右手に触れた。またしても体の芯にわずかな電流が走る。小さく息を吸い込むと、どくりと心臓が跳ね上がる。触れ合った部分がやけに熱く感じ、体は硬直した。そのまま固まっていると、ディーターがそっと手を握ってきた。」

「一瞬で、車内の空気が熱を帯びてきらめいた。感覚が手だけに集中し、耳の奥で心音がうるさく鳴る。二人とも手を握っているなんておくびにも出さず、無言でそれぞれの方向を見ていた。美紅は座席の正面にあるモニターを、ディーターは窓の外の夜景を。モニターは無音の古い映画を流し続けている。」

「静まれ、静まれ、私の心臓！ 美紅は懸命に祈った。こんなんでグラついてちゃダメ！ 相手はプレイボーイなんだから。こんなの、ただの挨拶よ。ドキドキするほどのもんじゃないって！」

「ディーターはさらに凶々しく指を絡めてくる。美紅はウブなティーンエイジャーに逆戻りした気分で、自分でも戸惑うほどうるたえていた。横目でチラリとディーターを見ると、抑えめなブルーの照明に眉目秀麗な顔が照らされている。」

「骨格も肌も瞳も、本当に美しい。そのどこか物憂げな表情がひどく色っぽくて、美紅の鼓動は乱れた。」

「気づくとイースト・ビレッジに着いていた。ディーターは何事もなかったように車を降り、美紅の手を取ってエスコートする。美紅はアスファルトに着地すると、ふらふらとよろめいた。」

「おい。歩き方がペンギンみたいだぞ」

「ディーターが意地悪くからかう。それを見て、美紅はやっといつもの調子を取り戻した。」

「うるさいわね！ こんなに高いヒールなんて履いたことないのよっ」

「本番までにはどうにかしてくれよ。それ」

「ディーターは偉そうに言っただけでナロータイを直し、髪を撫で上げた。」

「わ、わかっているってば！」

目の前には見上げるほど高い大聖堂のような建物がそびえ立っている。支柱から壁まで、すべてが黒い大理石造り。ガラス張りの入り口のドアからは店内の温かい光が漏れている。

『Reflections Of Living』——ニュー Yorker なら誰もが知る、フレンチをベースとした多国籍料理が楽しめるハイクラス・ダイニングだ。世界中のアーティストやセレブたちが集まる社交の場でもある。

ドラマや映画でしか見たことのない世界に、美紅はすっかり怖気づいてしまった。

「……どうした？」

呆然としている美紅を見かねて、ディーターが言う。美紅は気合いを入れ直し、ポーカーフェイスを作った。

「な、なんでもないわ。さあ、行きましょう」

美紅はディーターの腕にぶら下がるようにして数歩歩く。ヒールが高過ぎてサーカスの曲芸レベルだ。あの、高い靴を履いて歩くピエロみたいな……

「……ちよつと。なにニヤニヤしてるのよ」

美紅が睨み上げると、ディーターはクスクス笑いながらこう言った。

「いや。楽しい夜になりそうだと思うてね」



ディーター・アウグスト・キタヤマは目の前の光景に驚愕した。

恐るべきスピードと一分の無駄もない動きで、次々と皿の上の料理が平らげられていく。まるで完璧に計算しつくされた工場の生産ラインのようだ。下品ではない。テーブルマナーは完璧だ。目の前の女は料理を味わうことだけに、とんでもなく集中している。帆立貝だのテリリーヌだのが音も立てずに桃色の唇の間に吸い込まれていく。時折のぞく小さな歯が妙に色っぽい。

「おいしーい！」

美紅が満足げに喉を鳴らす。彼女が心から幸福感に包まれているのが伝わってくる。自然と、ディーターの口の中に唾が溜まる。そんなに美味しいのか？

「……そんなにじーつと凝視されると食べづらいんだけど？ 私のこと監視してるの？」

「ああ、すまない。悪気はない」

つい芸術的な食べっぷりに目が離せなくて、という台詞は呑み込んだ。それでも紳士としての礼儀は心得ている。

店内は天井まで吹き抜けて、空間を贅沢に使っている。内装はマンハッタンにふさわしくアー・ル・デコ調だ。フロア中央には、天井まで届く楡の木に、薄紫の芍薬と純白の蘭を散らした巨大なフラワーオブジェがあり、いいアクセントになっていた。

ここはそんな店内を一望できる、中層階のVIPルームである。当然、特別な人間しか入ることを許されない。下層フロアとは特殊なガラスで仕切られ、個室内は華美な装飾はなく、より落ち着いた雰囲気。壁には、かの有名な後期印象派の絵画が掛かっている。ドアの傍に支配人が控えてお

り、プライベートでくつろげる空間だ。

二人は真つ白なクロスの掛けられたテーブルに向かい合って座っていた。突き出しのアミューズグールが運ばれてきて以来、美紅は一度もディーターと目を合わせていない。

「食べないの？」

美紅は、初めてディーターの存在に気づいたかのように言う。

「いや……」

言われて初めてディーターはフォークとナイフを動かした。冷前菜はブルターニュ産オマール海老だ。オマール・ブルーと呼ばれる青みがかかったもので最高峰のブランドである。それにスライスしたキュウリとキャビアが添えられ、海老味噌ソースと絡めて食べる。……うん。食べ慣れた、いつもの味だ。

「こんなに美味しいもの食べたの、初めてー！」

美紅はご機嫌で今にも踊りだしそうさ。美味しそうに咀嚼して呑み込んでから、こう打ち明けた。

「実はいつもベイクドビーンズとトーストばかりなの」

「それはよかった」

「あなたは、あんまり美味しくなさそうね？」

「この料理は食べ慣れているから、感動がないだけだ」

「ええっ！ 嘘」

美紅は気の毒そうに眉尻を下げた。

「こんなに美味しいのに感動できないなんて、なんか可哀想」

「まったくだな」

この料理を食べ慣れたせいで感動できないディーターと、食べたことがない故に感動できる彼女。真に可哀想なのはどちらか。一つ言えることは、彼女のほうが自分より数倍幸せそうだった。とだ。少なくとも、今この瞬間は。

「ああ、ほんとに美味しい！ きつと今夜のことは一生忘れない」

花が咲いたような彼女の笑顔に、ディーターも釣られて微笑む。彼女はキラキラしている。彼女より美人でスタイルのいい女はたくさん見てきた。だが、こんな風に弾けるほど輝いている女は見ることがない。

「ステフにも食べさせてあげたかったなあ。これってテイクアウトできないのかしら」

「ステフ？」

「あ、ハイスクール時代からの親友なの。不動産会社で事務をやりながら、ロマンス小説家を目指しているのよ」

表情がころころ変わるのを見ているのは楽しい。彼女はとても幸せそうで、その幸せを誰かに分けたくてしょうがないという顔をしている。今の彼女にその幸福を自分が与えたのだと思うと、ディーターは誇らしい気持ちになった。

「なんでも好きなものを頼むといい。ワインでもデザートでもなんでも」

「もちろん、そうさせてもらいます。これも報酬の一部だもんね」

美紅は楽しそうにペロリと舌を出した。ディーターは自然と顔がほころぶのを止められない。まったく、まるで子供だな。不思議とリラククスしている自分に気づく。

これまでの女たちはどうだった？ 皆、体型を気にして小鳥みたいに皿をつつくだけ。視線でディーターの体を舐めまわし、ベッドに行くことしか考えないハイエナだ。こちらの関心を引こうと大して興味もない話題を浅い知識で振ってきた。繰り返される退屈な笑顔と退屈な会話。

——僕を喜ばせる方法は実にシンプルなのに。心からこの場を楽しんでくれさえすればいい。美紅みたいに。そうすれば、その感情が僕に伝染し、こんなに楽しい気分になれるのに。

「あの、現地に飛ぶ前にいろいろ打ち合わせしておいたほうがよくない？ これから私たちはフィアンセを演じるわけだから」

食事が一段落した美紅はアイステイヤーのような瞳でじつと見つめてくる。

「やる気になってくれてうれしいね」

「私は最初からやる気満々よ。ベストを尽くすつもり。充分な報酬も頂いてるし、愛する人との仲を引き裂かれそうあなたからの従妹のアレクシアを救うためですもの。同じ女性として不憫に思うし」

そうだった。本来の目的をすっかり忘れていた。

「ああ、そうだな。僕の家族にいろいろ質問されるかもしれないから」

「そうよね。二人の出会いはどういうことにする？」

「どこかのパーティーで出会ったってことでもいいんじゃないか？」

「もしもし？ 私みたいな職なし家なしの貧乏女優がどんなパーティーに出席するって？ 世の中の女性が皆パーティーに出ていると思ったら大間違いよ。私なんてハイスクールの卒業パーティーが最初で最後だし」

「ふむ。それもそうか。君にいい考えはある？」

「私の日常生活で、あなたみたいな億万長者と出会うチャンスってあるかなあ？」

美紅はしばし真剣に考えてから、こう提案した。

「車の事故ってのはどう？ 私の運転が下手であなたの車にぶつかったのが出会いのきっかけ」

「三流恋愛小説の筋書きだな。しかもリアルにやられたことがあるよ。金目当ての女にね」

ディーターは当時を思い出し、少々うんざりした気分になる。

「それに君、車の免許は持っているの？」

「……持ってません」

「すぐバレる嘘はダメだな」

「じゃ、私が講師を務めるダンススクールにあなたが通っている、ってのはどう？」

「悪いがダンスは幼少の頃から英才教育を受けている。スクールに通っているなんて言ったら、僕の親族は変に思うだろうな」

「うーん、そうかあ。私がバイトしてたコーヒーショップにあなたがお客として来た、とかは？」

「いや、僕はめったにコーヒーを外で飲まない。オフィスにはコーヒーメーカーがあるからない豆を使ってるよ」

「これもダメかあ。なら、親友の元恋人だったっていう設定は？」

「なるほど。親友から君を寝取ったと。しかし、親友は誰だと突っ込まれたらどうする？ その親友と君はどうやって出会ったんだろう？」

「うーん、細かい裏設定が必要だし、すぐにバレるか」

「プロットを練るのもひと苦労だな」

「実は私は記憶喪失で、あなたは過去に私に騙されて心に深い傷を負った……」
美紅は声を落とし、深刻な表情をした。

「——あれから二年、時はきた。今こそあのアバズレに目にモノみせてやる！ 記憶を失った私に忍び寄る、暗い影。あなたは私に復讐しようと思む億万長者つてのは？」

ディーターは声を上げて笑った。ひさしぶりに聞いた自分の笑い声に、自分で驚く。いつの間にか僕はこの会話を楽しんでいる、とディーターは思った。

「悪くないね。じゃあ僕は拳銃と毒薬を常を持っておかないとな」

「そうね。せっかくだから口髭の生えた名探偵でも雇っておいでよ」

「いいだろう。盗まれた宝石と犯人の執事も用意しないとな」

「ちよつと、真面目にやつてよ！」

言いながら美紅も笑いを堪えている。

「君が先に言い出したんだろう？」

——なぜ、僕はこんなにはしゃいだ気分になるんだろう？ ディーターは話しながら冷静に考察

した。美紅が魅力的だから？ それだけじゃない。美女は飽きるほど見てきた。誘惑したり誘惑されたり、場数もかなり踏んでいる。

きつと自分には美紅のようなポジションの女性がいないからだ。利害関係が一切なく、色恋沙汰ともほど遠く、仕事にも関係なく、気を遣ったり遣われたりするものない関係。友人でも恋人でもセフレでもない。普通に生きていたら目を合わせることもない女性。遠い異国の地で現実を忘れたまま同じ列車に乗り合わせたような。きつと彼女にとってのディーターも同じなんだろう。

「で、どうするんだ？ 僕らの出会いは」

「はあーあ。ほんとに難しいなあ」

美紅が頭を悩ませる様子は可愛らしい。

美紅はさんざん首を捻ってから、こう言った。

「じゃあ、あなたの会社の採用面接を受けたのが出会いのきっかけ、とかは？」

「それなら嘘は吐いてないな。まさに現況どおりだ。が、悪いが僕は入社希望者を口説く人間じゃない」

「例外を作ってください。じゃないと、私とあなたは永遠に出会えません」

「……いいだろう。では、君が我が社の求人に応募してきて、面接で僕は君の魅力にノックアウトされた」と

「うーん。ちよつと無理があるかなあ？ 私なんかじゃ明らかに力不足な気が」

ディーターは美紅のくつきりした胸の谷間を一瞥した。まったく、なんでそんなに肌触りがよさ

そうなんだ。……そんな風に考えてしまうのは、この忌々しい不眠症のせいか。

「問題ない。充分魅力的だ」

言ってから自分の言葉に驚く。——魅力的だった？あの完全に圏外だった純情玉ねぎが？まったく、今夜の僕はどうかしてるな。だが、嘘は吐いていない。確かに彼女は魅力的に変身した。とても劇的に。その努力は認めてやるべきだ。

ディーターは小さく咳払いしてから、こう釘を刺した。

「ところで、ときどき敬語になるのをやめてくれないか。フィアンセ同士、敬語はなしだ」

「わ、わかった」

「君に関する情報はひととおりに頭に入っている。他に質問はあるか？」

「ちよつと気になってたんだけど、私以外にも応募者がいたわけよね？」

「ああ。表向きは秘書の募集だったからな」

「なぜ、私を選ばれたのかしら？自分で言うのもあれだけど、大した学歴もないし、自慢できるキャリアもないと思うんだけど」

「君を強く推薦したのはアロンなんだ。この件はアロンに一任している。だから、僕と面接した時点でほぼ君に決まっていたんだよ。最終面接は僕との顔合わせ、いわばオマケみたいなものだ。よほどのことがない限り、君を落とすつもりはなかったよ」

「ふーん。じゃあ、あなたに採用されたというより、アロンが私を採用したってことね」

「ま、そういうことだ。奴は僕よりも人を見る目があるからね。常に僕の会社とグループ全体のこ

とを考えてくれている」

だが、アロンはどういうつもりで彼女を採用したんだ？ディーターはちらりと思う。ぶかぶかスーツに玉ねぎヘアがダイヤの原石と見抜いたからか？だが、今回のミッションに美人でセクシーである必要があるか？どうも腑に落ちないな。

「なんだか腑に落ちない。アロンがなぜ、私を選んだのか」

美紅は考えながら言った。

「君はなかなか鋭いな」

「あなたって恋人はいないの？」

「いるっちゃいるし、いないっちゃいないな」

「じゃあ、その人に頼めばよかったんじゃない？」

「婚約者の芝居を？勘弁してくれ。そんなこと頼んだら、勘違いして芝居を真実にしようするだろう。僕は結婚する気はさらさらないからね」

面倒な話題だ、とディーターは眉をひそめた。これだから女は厄介だ。口を開けると二言目には愛だの結婚だのと騒ぎ出す。

ディーターはワイングラスに唇をつけた。ほのかにスパイスの効いたバランスよい果実味。蓄微やスミレの得も言われぬ芳香が口いっぱい広がる。ブルゴーニュの特級畑で栽培し醸造された赤ワインだ。これ以上の代物はニューヨーク中探してもないだろう。

「結婚しないって、一生？」

ワイングラスを傾けるディーターをじっと見つめ、美紅が言った。美紅の皿はすでに空になつてゐる。給仕長がやってきて恭しく皿を下げた。

「そう。生涯独身だ。家庭を持つ気は一切ない」

ディーターは断言し、芸術的に盛られた牛肉のローストにナイフを入れた。マンハッタンで最も寝かせたエイジングビーフはとろけるほど柔らかく、刃先が抵抗なく埋まってゆく。

「今はそんなこと言つても、愛する人が見つければ気が変わるんじゃない」

「無理だろうな。愛する人なんて現れないから」

「……人を愛したことがないの？」

君には関係ない、と突っぱねようとして思い直す。美紅もプライベートを捧げてこの茶番に協力してくれている。自分自身のことをなにも話さないのはフェアじゃない。それに別に隠すことでもない。

「もちろん、愛したことはあるよ。僕が命を捧げ、生涯をともしにするならこの人しかいないと思つてた人がいる」

「ごめんさい。もしかしてその人、亡くなつたの？」

「いや。生きてるよ。ピンピンしてる。親父の今の奥さんだよ。実の父に寝取られた」

美紅がはっと息を呑んだ。ディーターは冷静にそれを受け止めた。そりゃ誰でも引くだろうな。

「勘違いしないでくれ。僕は父も彼女も恨んでいない。今はなんとも思つていないし、家族としてうまくやつている。もちろん、当時は親父を憎んだよ。彼女も殺してやるうかと思つた。でも、本

当に仕方ないんだ。親父はそういう性格なんだよ。他人が持つてゐるものを、どうしても欲しくなる。自分で止められないんだ。彼女も同じだ。金がどうしても欲しくなる。自分でコントロールできない。それが二人のありのままの姿なんだ。彼女の本性を見抜けなかつた僕が悪い」

「そのせいで愛を信じられなくなつたの？」

「いや、そんな悲愴なもんじゃない。どう言えればいいのかな……愛も信じてるけど、愛だけじゃないんだ。愛こそすべて、というのは極端すぎる。愛がすべてという考えと、金がすべてという考えの二つがあるとす。僕はどちらも真実だと思ふ。僕が否定したのは愛や金じゃなくて、その極端さだ。百かゼロかの偏つた発想、というのかな」

「わかる。要するに愛も金もどちらも大切つてことね」

「そのとおり。どちらも追いかけてしまうのが人間の性であり、飾らない姿なんじゃないかな。汚い部分も綺麗な部分も、どちらもあつて当然。二人はそういう大切なことに気づかせてくれた。金目当ての女も愛だけだという女も、偏つてゐるといふ点では同じなんだよ。どちらかを隠そうとする人間は、僕にはわかる」

ディーターはふと口を噤んだ。今夜は呑みすぎたかもしれない。いつの間にか店内の照明が少し落ち、静かなピアノの演奏がはじまつてゐる。今までこんなことを誰にも話したことはなかつた。ましてや知り合つて間もない女になんて。美紅は不思議だ。こちらのペースを乱し、リラクセスさせ、たちまち無防備にしてしまう。それは他ならぬ、彼女自身が無防備だからだろう。

「そっかあ。あなたの言うこと、わかる気がするなあ」

美紅は両手を組んで肘をテーブルに載せた。揃えられたネイルはドレスと同じ深い青に塗られ、ラインストーンが光っている。文字通り爪の先までドレスアップしてきたらしい。

青がよく似合う、とディーターは思った。

「なら、君はなにを一番信じてる？ 夢とか愛とかそういうもの？」

「夢だけじゃ、お腹はいっぱいにならない。愛とエゴを見極めるのは難しいわ」

「リアリストだな。悪くないね。ならば、金か？」

「お金は必要ね。けど、お金だけでも幸せになれない。私の中の一番はお金じゃない」

「ならば、なんだ？」

「たぶん、笑われるかも」

「他人の真剣な話を嘲笑するほど落ちぶれてはいないが」

「……私が信じているのは、予感、かなあ」

「予感？」

「うん。言葉にするのは難しいんだけど、そこになにかがあるかもしれない、っていう予感」

美紅の瞳は光を反射してきらめく。ディーターは不思議と彼女の声に聞き入っていた。

「マンハッタンの夜景を見たときにね、このたぐさんの輝きの中にとってもなくすごいものがあった、それを私が探し出すのをずっと待ってるんだっていう予感がしたの。ワイキキの青い風を感じたり、素敵な音楽を聞いたりしたときの、なにかが起りそうなワクワクする気持ちも、私が言う予感に含まれるわ。お金とか夢とか愛より、そういう予感を信じてるの」



「直感、ですかね」

ハンドルを握るアロンはいたって真面目で、からかっている様子は微塵もない。

直感でということよ、と助手席に座った美紅は呆れた。そんな理由で自分がフィアンセに選ばれたなんて。

「お宅の会社はいつも直感で人を採用するわけ？」

美紅は、不満に思いながら言った。

いよいよ明日は出国日。フィアンセとしてエーゲ海の島に二週間滞在し、そこでディーターの一族に正式に紹介される。今日もその打ち合わせと準備に追われた。と言っても、美紅はアロンの言いなりになって必要書類にサインし、右へ左へ移動しているだけだったが。

今は手続きがすべて終わり、アロンが車で美紅のフラットまで送っていく途中である。その車中で美紅は「なぜ自分をディーターのフィアンセ役を選んだのか」と、アロンに尋ねたのだ。

もう夜だというのに相変わらずパーク・アベニューは渋滞し、テールランプがずらりと並んでいる。

「採用担当者は別にいます。今回は特別に私が担当しましたが。私に限って言えば概ね直感に従いますね。一〇〇%ではないですが」

アーロンはハンドルを操りながら答え、さらにつけ加えた。

「もちろん、必要な情報をすべて頭に入れておくのが前提です」

「じゃー、私もあなたの直感に引っ掛かったわけだ」

「そういうことです」

ようやく渋滞を抜け、車はスピードを上げはじめた。この分なら、美紅のフラットまであと十分ほどで着くだろう。

「じゃあ理由なんて聞いてもしようがないのね。直感にあれこれ理屈を求めたつて無駄でしょうから」

「あなた以外に適任者はいません」

アーロンは自信たっぷりに断言した。

「随分自信があるのね」

「自信がなければ、そもそも採用担当になりません」

そんな話をしているうちに車は静かに美紅のフラットの前に停車した。美紅は車の知識がないから、この車がとてもいい車だつてことしかわからない。夜も更け、辺りは人気がない。足を引きずつた野良犬がゴミ箱をあさっている。遠くでパトカーの音が微かに聞こえた。

「あなたはなぜディーターの秘書をやっているの？ どうしてこの会社に入ろうと思ったの？」

美紅はふと興味を覚え、聞いてみた。

「ボスとは古いつき合いです。私の両親がボスの実家に住み込みで働いていました。それで歳が近

いたため兄弟のように育てられました。もちろん、使用人としての分はわきまえるよう教育されましたが」

「そんなに長いつき合いなんだ」

「——てつきり、私と同じように採用面接を受けて入社したんだと思っていた。ディーターとアーロンは上司と部下以上に強い絆があるのね。」

「ええ。ボスは昔から、なににおいても優秀でした。私はボスとんでも張り合っていましたよ。学業もスポーツも恋人さえも」

「へええ。じゃあ今も恋人を取り合ったりするの？ 女優のメリンダとか？」

美紅はゴシップ誌の表紙を思い浮かべた。あのグラマラスな美人女優をアーロンと取り合っているのかしら？

「あはは。ゴシップ誌はデタラメだらけです。メリンダは一時的に関係を持っただけで、ボスは本気じゃないですよ。取り合いにもならない。どちらも本気にならないと、取り合いできませんからね」

「なぜ、ディーターと張り合うの？」

「私はボスが欲しがるものを欲しくなるんです。無性に」

「それってディーターのお父さんみたいね。実の息子の恋人を寝取った」

アーロンは驚いたように目を見開いた。

「誰からそんな話を聞いたんですか？」

「ディーターご本人から聞いたのよ」

「ボスがそんな話をあなたにしたんですか」

「そうよ。この間のディナーでプライベートな話をたくさんしたの。仮にもフィアンセを演じなきゃいけないだもん。必要だから話したんじゃない？」

「あなたを信用して話したんでしょう」

「もしくは信用するフリをしているのかもしれないけど」

「そんなことはありません」

「息子の恋人を寝取るなんて……私だったら実の親とはいえ許せないな。死ぬまで顔を合わせたくない」

「ボスのお父上には……キタヤマ・グループの現総帥に当たる方ですが……深い考えがおりるんですよ」

アーロンは子供をあやすように微笑み、言葉が続ける。

「私は総帥には並々ならぬ恩があります。総帥のおかげで体の弱い母は生きながらえましたし、冤罪で刑務所に入れられた父も助け出されました。私に教育を施し、衣食住を与えてくれたのも総帥です」

「ずいぶん人格者みたいな言い方ね」

「実際、人格者ですから。私はこれまで与えられてきたものを返すつもりです。総帥とグループのためにね。総帥の子であるボスに対しても同じ気持ちです。親子関係は悪くとも、私自身はどちら

も同じだけ大切です。ボスは信頼できる人ですよ。想像を絶する苦勞をして、のし上がった人です。総帥がとても厳しい方だったから」

「想像を絶する苦勞、ね。なにもかも恵まれている人にはふさわしくない言葉ね」

美紅は鼻で笑った。——イケメンで御曹司でCEOが苦勞ですって？ 底辺を這いずり回って生

きている私からしたら、ちゃんちゃらおかしいわ。

「裕福でしたが、厳しかったですよ。生まれて間もなく母親が亡くなり、総帥もほとんど家に寄りつかなかったたので、ボスはたった一人で幼少期を過ごされました。しかも十三歳になったら身一つでグループのアジア工場へ下働きに出されたんです。大の大人でも音を上げる過酷な労働環境です」

「キタヤマの令息がアジアの自動車工場？ ほんとに？」

「ええ。工場の狭い寮に労働者たちと寝泊まりして、朝から晩までラインに立つんです。身分は明

かさねずにね。将来、グループを背負って立つ者は現場をよく知っておくべきというのが総帥のお考えです。子供は邪魔者扱いされてこき使われたでしょうし、当然、合間を縫って勉強もしなければならぬ。十六歳になって家に戻られたときには、すっかり人相が変わっていましたよ」

信じられない言葉に、美紅はしばし絶句した。十三歳ですって！

「可哀想に。十三歳と言えはまだまだ子供じゃない」

美紅は胸が痛くなった。あんなに自信に満ちた姿の裏側に、そんな壮絶な過去があるなんて。勝手に甘ちゃんのお坊ちゃま扱いしちゃうた。なのに、ディーターはなにも言わなかった。傲慢だっ

49 待ち焦がれたハッピーエンド

たのは自分のほうだ。

「その後、奨学金をもらって大学に進学し、情報科学の優等学位とコンピューター解析の博士号を取得されました。在学中ご自身で会社を立ち上げて、血のにじむ努力をされて今のボスがあるわけです」

「苦労なんか知らないお坊ちゃまだと思ってた」

「私はボスを尊敬していますよ。ちよつとワガママで傲慢ごうまんなところもありますが」

「ちよつとどころじゃないですよ。自信家で自意識過剰かじょうで上から目線めせんだわ」

「それはボスがまどつている鎧よろいです。人間は誰しも弱い内面を守るために鎧よろいをまどつてしまう？ボスは繊細せんさいで感受性かんじせいが鋭いさめど。独占欲も強いが、それは寂しさの裏返しです。とても孤独な人なんですよ」

「繊細せんさいねえ……。けど、孤独というのはわかる気がするな」

——ディーターは私のことを「毛を逆立てた子猫」なんて言っただけど、警戒けいけいしているのは彼なのかも。ディーターのような人種は簡単に人を信じない。常に相手の腹を探り、真意を読み取るうとし、利用されないように目を光らせている。そんなのつて疲れるわ。

「……ボスのことを愛しはじめていますね？」

「えっ？」

美紅はギクリとした。とっさに手と首をぶんぶん振る。

「まさかっ！ ないないない。私はお金のために今回の話を引き受けたのよ！ それに、まだ二回

しか会ってないのに」

「顔に『気になる』って書いてありますよ？」

「なんなの？ あなた、占い師でもやつてるの？」

「いいえ。他人の感情の動きに敏感びんかんなだけです。言葉よりもその口振りが真実を語るんですよ」

「だからなに？ 目の前にイケメンでセクシーな男がいたら、誰だつてときめくでしょ？ ちよつとぐらゝ」

「特別な感情を抱いてはいけないという条項は、契約書にありませんよ」

「契約書になくても釘くぎを刺されたの。僕のことを好きになるなつて」

「ふーん。ボスがそんなことを」

アーロンは考え込むようにハンドルを長い指でトントン、と叩く。

「楽しいバカンスになりそうですね」

「私はあなたみたいに楽しめないし、なんだか怖い。逃げ出したい。なにかが起こりそうで……」

美紅は不安が膨ふらみ、無意識に爪つめを噛かむ。

「……あ。ごめんなさい。弱気なこと言つて。ちゃんと仕事はするつもりだし、契約は守るから」「いいんですよ。思つたことはなんでも話してください。私が必ずサポートしますから」

つ、とアーロンの親指が美紅の頬ほおを撫なで、唇の上で止まった。近くで見るとアーロンの肌は女性のようにきめ細やかで綺麗きれいだ。薄闇うすやみの中、至近距離で彼と見つめ合う。アーロンの唇がゆっくり近

づいてくる。

「悪いけど」

美紅は右手をすつと伸ばし、四本指で彼の唇を押さえる。そしてひどく冷えた気持ちで、きつぱり告げた。

「あなたとは、そういう気持ちになれないの。全然」

アーロンは小さく笑うと、大人しく体を離れた。

「まったく、つれないなあ。ヒロインは本命以外には目をくれちゃいけない、なんてルールでもあるんですか？」

「私は誰でもホイホイキスするような女じゃないの！ それに、ヒロインじゃないし、本命って誰のことよ？」

アーロンは肩をすくめ、おもむろに車から降り、ぐるりと助手席側に回った。助手席のドアを開け、紳士的に手を差し出す。

「どうぞ、お嬢様。仰せの通り、紳士的に送り致しましたよ」

「……送ってくれてありがとう」

美紅は素直に手を取って車から降りた。そしてアーロンを見上げ、念を押した。

「あなた、勘違いしてるみたいだけど、ディーターのごことは本当になんでもないのよ。あんな超セレブCEOが私なんて相手にするわけないんだから」

「わかってますよ」

そう言ってアーロンはスマートに微笑む。本当にわかってんのかしら？ と美紅は怪しむ。

「おやすみなさい、美紅。明日は遅れないようにモーニングコールします。きっと、なにかももうまくいきますよ。よい夢を」

「おやすみなさい。あなたも、よい夢を」

美紅は上り慣れた古い階段を三階まで上がり、自宅に入り鍵を締め、慎重にチェーンを掛けた。室内はむっとして外より蒸し暑い。しばらく電気もつけずに、ぼんやり立ちすくむ。

明日からいよいよ本番だ。今夜眠ったら明日の朝にはもうエーゲ海に向けて旅立つことになる。そう思ってもなんだか、現実感がない。

……うまくやれるかしら？

美紅は小さく首を横に振った。ううん、考えたって、仕方ない。もう賽は投げられたのだ。成功しようが、失敗しようが、やってみるしかない。もう後戻りはできない。進むしかないのだ。

よし、と美紅は気合いを入れた。

下手くそでもなんでも、とにかくベストを尽くすのよ！



かくして、プライベートジェットはジョン・F・ケネディ国際空港から離陸した。

フライトは十数時間。夏季のニューヨークとアテネの時差は七時間だ。プライベートジェットの

機内はモノトーンで統一された上品な内装。コックピットから後方まで広々と見渡せる。キッチンやベッドルーム、シャワールームや洒落たバーまであり、快適なフライトが楽しめそうだ。

リムジンといいジェット機といい、お金持ちって高級ホテルのスイートをポケットに入れて持ち歩けるのね、と美紅は感心した。

ざっくりしたベージュのニットワンピースに身を包んだ美紅は、興味津々で歩き回っていた。機内は適度な温度と湿度に保たれ、一般旅客機より清涼な空気に満ちている。大きな冷蔵庫を開けると、豊富な種類のチーズやキャビア、見るからに美味しそうなロティサリーチキンや魚料理などが二人分用意されていた。バーカウンターには色とりどりのボトルがずらりと並び、ワインセラーには世界各国のワイン、シャンパンがぎっしり詰まっている。機内で豪華なパーティーができそうだ。めちやくちや美味しそう！ ご馳走に目がない美紅は目を輝かせた。

ディーターはリビングエリアにあるソファに腰掛けている。真っ白なシャツに鮮やかなマリナーブルーのジャケットを羽織り、カジュアルな白のチノパンというスタイルだ。長い足を組んで悠然と業界紙を広げる様子は、まさに一流ビジネスマンの休日といった風情である。

こんなときまでお仕事なんて……美紅はディーターを横目で見て呆れる。あれじゃ、すごい設備も豪華な料理も宝の持ち腐れだわ。

美紅は高いヒールで慎重に歩きながらダイニングを通り抜けてバスルームを覗き、歓声を上げた。綺麗！ 広い！ ほとんどホテルのバスルームと同じじゃない！！

壁はピカピカに輝き、カラフルなデイスペンサーはどれも洒落だ。バスタオルもバスローブも

あり、有名ブランドのアメニティが揃っている。これだけあれば手ぶらでも大丈夫だったな。スーツケースにシャンプーやリンスの試供品をぎゅうぎゅう詰めてきた美紅は「無駄だったわ」と歯噛みした。どう見てもこつちを使ったほうがよさそうだし。

さらに奥にあるのはベッドルームらしい。立派な木の扉を開け、目に入った光景に美紅はぎょっとした。

ダブルベッド!?

いや、正確にはダブルじゃない。キングサイズだ。いずれにせよ、どう見ても二人で一緒に寝る用である。美紅は動揺を抑えつつ、部屋の端まで歩いてもう一つのベッドを探した。

……ない！ ベッドが一つしかないじゃないっ！ どういうこと!?

いやいやいや、落ち着け。一つしかないからって一緒に寝るとは限らないから！ そうよね？ フライトは十数時間たもの、それぐらい起きてられるし。ベッドなんて絶対使わないから大丈夫。けど、ベッドが一つしかないってことは、あれよね？ ディーターがガールフレンドと旅行するときはやっぱり……当然ながら……美紅は一人想像して頬を染めた。

「美紅、おいで」

突然声を掛けられ、美紅は飛び上がった。振り返ると、ディーターがドアの枠に寄り掛かって立っている。

「せっかくだから、あつちで一杯やらないか？」

ディーターは腕を組んだまま、顎でリビングエリアを指した。

「そ、そうね。頂くわ」

美紅は動揺を隠そうと顔を伏せながら彼の前を横切ろうとした。そのとき。

「待てよ」

低い声と同時に、長い腕が伸びてきて美紅の行く手を塞いだ。

美紅は首だけ横に向け、ディーターを見上げる。彼は美紅を見下ろしながら、傲慢に唇の端を上げた。

「なに、見てた？」

「えっ？ えっ？ なにつて、なにも……。お部屋を見てただけど？」

「……嘘が下手だな」

気づくとディーターの両腕に囲われ、逃げ場がなくなっていた。

整った唇が近づいてきて、耳元で低くささやく。

「着くまでこの部屋で過ごさないか？ 二人で」

微かな息が耳たぶをくすぐり、首のうしろがゾクリとした。

そのとき、ぐにやりと右足の踵がヒールから滑り落ち、美紅は真横によるめいた。

「きゃっ！」

そのままディーターのがっしりした左腕に倒れ掛かり、彼に抱きとめられた。

たくましい腕が腰に回り、彼の尖った喉仏と首筋がアップになる。微かに上品なムスクの香り

した。

ドクン、と鼓動が胸を打つ。

血液がすごい勢いで全身を巡り、頬が紅潮してくるのがわかった。

……まずいわ。

不覚にも美紅はときめいてしまった。なんて頼もしいんだろうと。

しかし、実際は下手クソなタンゴでも踊っている体勢だった。

「……まったく。君はいつだってムードもヘツタクレもないな」

ディーターが忌々しそうに舌打ちした。それでもしっかりと支えてくれている。

「わ、ご、ごめんなさい。ありがとう」

美紅はへっぴり腰でディーターの腕にすがりつつ、なんとか体勢を立て直す。このどたばたのおかげで美紅のドキドキにディーターは気づいていないようだ。

「あ、あなたが急に变なこと言うのが悪いんだからね！」

美紅は腕を組んで偉そうに言った。それを聞いたディーターはプツと噴き出す。

「やれやれ。君を口説く男は大変だな。同情するよ」

「大きなお世話よ！ 私を口説いてくれる人は、きつとちっちゃいことなんて気にしないんだから」

「そんな奇特な男がいるなら、この目で見てみたいね」

二人は言い合いながらバスルームを通り過ぎ、リビングエリアへ戻る。美紅はおぼつかない足取

りについてゆき、ソファに座ったディーターの隣にドスンと落下した。

「そのヨチヨチ歩きは、どうにかならないのか」

「努力はしてるの。そんなにすぐヒールに慣れないのよ」

ムキになる美紅を見て、ディーターはおかしそうに笑う。彼が笑うと目の横に小さな皺がで、眉尻が下がって随分印象が穏やかになる。笑顔もどろけるほどハンサムだった。

「まあ、そのなんだか懸念な姿が可愛らしいよ。よくよく考えたら、そのままがいいかもしれない。高いヒールで颯爽と歩かれても興ざめたな」

「馬鹿にして」

「馬鹿にしてるさ」

今日はディーターとの距離がすごく近い、と美紅は気づく。彼はいつも被っている冷酷な仮面を捨て、素のままにいるような気がする。素の彼は意外と少年っぽくて、それがたまらなく素敵で……なんかドキドキする。

つて、ちよつと待てよ!? 美紅はそこで感情のシャッターを下ろす。いやいやいや。これは恋じゃないからね? ただの純粹な好意だから! イケメンに対して抱く、一般的な感情だから!

「ねえねえ、プライベートジェットつてすごいよね! 立派なバスルームまであって、ホテルみたい。とつてもステキ!」

美紅は自分の気持ちを誤魔化すように大きな声でまくし立てた。

「ふーん。これにそこまで感動する女性は初めてだよ。乗れて当然、という顔をされるより百倍い

いね」

ディーターは満足そうに目を細め、シャンパンの入ったグラスを美紅に渡した。シャンパングラスは驚くほど薄く、黄金色の液体がゆらめいている。

「なにに乾杯する?」

「もちろん、計画の成功を祈って」

「成功を祈って」

カチン、とグラスの触れ合う涼やかな音。シャンパンはキリッと冷えていた。口に含んだ瞬間、イチゴやアロマの香りが魔法のように広がる。香りの強さに驚いている間に、泡が弾けながら舌を滑り、鮮やかな余韻を残した。

「ナニコレ。こんなの呑んだことない! むちゃくちゃ美味しい!!」

「お目が高いね。これはフランス北部のシャンパーニュ地方で作られた、世界に二千本しかないレアなやつなんだ。尋常じゃないコストと手間が掛かっている」

ディーターは得意気に言って優雅にグラスを傾けた。

「な、なるほどね。あなたと出会わなければ、死ぬまで呑むことはなかったでしょうね……」

美紅はちらりとボトルに目を遣った。スリムなフォルムの黒いボトルに、シルバーのラベルが貼られている。きつとこれ一本で一万ドル以上? もっと? 下手したら私の年収ぐらい軽くいきそうね。そんなものをコーラみたいに呑んでる人と私が婚約者だなんて、皆信じるの?

「ねえ、ちよつといくつか最終確認しておきたいんだけど」

美紅はバッグからメモ帳を取り出しながら言った。

「もちろん、いいよ」

「どういうところに惹かれ合ったことにする？ これはフィアンセを紹介する場では絶対聞かれると思うけど」

「そうだな……」

二人は答えを探すようにじつと見つめ合った。

「ディーターの瞳って、よく見るとグリーンなんだね」

美紅は顔を寄せて覗き込んだ。複雑な虹彩がきらめき、オパールみたいだ。

「綺麗！ 光の加減で色が変わる」

すると、引き寄せられるようにディーターの体が動いた。整った唇が近づいてきて、自然に彼は首を傾けた。

気づくと、ぴったり唇が重ねられていた。

美紅はびくつと驚いて、ソファの端まで身を離れた。

「ちよつと、なにすんのよっ！」

「なにつて」

ディーターは心外だというように眉を上げた。

「なにを慌てているんだ。フィアンセなんだから、これぐらい当然だろう？」

「えっ？ ちよつ！ まっ……ええ、うっ」

美紅はぐつと言葉に詰まる。が、即座に体勢を立て直し反論した。

「そ、それはそうかもしれないけど、心の準備ってもんがあるでしょ！ こっちは初心者なんだから」

言いながら、予想外に唇は柔らかかったわ……と、どうでもいい感想が頭をよぎる。気合いと根性ではやる鼓動を抑えた。

「ちよつと試しただけだ。君がちゃんと契約を履行してくれるかどうかをね。それともまさか今のがファーストキスだったとか？」

「そんなわけないでしょ！ 馬鹿にしないで。いきなり過ぎて、ちよつとびっくりしただけよ」

「構わないよ。皆の前でそのリアクションを取らなければね」

ディーターは小馬鹿にするように笑い、偉そうにソファにもたれる。それから肘掛けに肘をつき、クールに右手で額を押さえ、こう言った。

「さっきの質問は、そうだな。君のその鼻柱の強さに惹かれたことにしようか。それに、信じられないほどウブでお子ちゃまなところにも」

「じゃあ、私はあなたの傲慢なところに惹かれたことにするわ。超上から目線で自分のことを好きになるな、とか釘を刺しちゃう痛いところ」

美紅は挑戦的な目で睨みつけた。ディーターはそれを横目で観察し、ポツリとつぶやいた。

「君は男のことが全然わかってないんだな」

「正直、わからないよ。大して好きでもない人と簡単にキスしてセックスできるなんて」

「嫌いな相手とはキスもセックスもしないよ。当然、好意は持っているさ」

「それがわかんないって言ってるの。好意さえあれば愛していい相手でもいいの？」

「愛だって？ ……驚いた。ずいぶん古典的な考え方だな。セックスなんて、欲望があればできる」

「それじゃ、ただの性処理じゃない」

「セックスは性処理そのものだと思うが？」

「寂しい人ね。セックスは性処理だけじゃない。心も繋がる行為よ。友達とセックスはしないわ。好意があるだけじゃイヤ。誰とでもってわけにはいかない」

「まだ若いからだよ。歳を取れば考え方が変わるさ」

「変わらないよ。変わりたくないもん。古典的だと笑われようと私は信じてるの。きつといつか運命の人に巡り会って」

それを聞いてディーターは声を上げて笑った。

「おいおい。恋愛小説の読みすぎだぞ。映画みたいなラブロマンスが実在するぞ？」

「うん。でも残念ながらあなたには運命の人は現れない」

美紅は真剣に言葉を続けた。

「信じていないものを、探せないわ」

その言葉が響いたのか、ディーターは少し呆気に取られた顔をした。しかし、すぐ口角を上げ、冷やかすように言う。

「……だろうね。ないと思ってるものは、探せない。ただ、僕は君とこんな場所で論争をするつもりはないよ」

「あ、ごめん。批判してるわけじゃないの。あなたが信じてないものを、無理矢理信じさせるなんてできないもの」

「僕も君が信じているものに、いちいちケチつけるつもりはないよ」

「でも、今、笑ったでしょ？ 馬鹿にしたでしょう？」

「気を悪くさせたら謝るよ。馬鹿にしたわけじゃなくて」

「そういうのを馬鹿にしてるっていうのよ！」

「そうじゃない。ただ……どう言えいいのか……」

ディーターは物思いに耽るように数秒黙り込む。それから真正面の小さな機窓に目を遣り、こう言葉を続けた。

「ただ、羨ましいと思っただけだ」

気流の乱れで機体がほんの少し揺れた。それに構わず美紅は目を凝らし、聞き返す。

「羨ましい？」

「ああ。そんな風に信じるものがあって」

そう小さく言ったディーターは、正直に本心を言っているように見えた。このときの彼はここではない、どこか遠い追憶の彼方へ思いを馳せているようだった。彼にまだ信じるものがあつた頃に。なにかを強く信じていた遠い過去に。

もしかしたら彼は自らを偽って生きてるのかもしれない、と美紅は直感する。傲慢で皮肉屋で嘲笑癖のある彼は、本当の彼じゃないのかも。——やっぱり私はディーターのことをほとんど知らないんだわ。

彼の精巧な横顔がやけに寂しげで、美紅の胸はわずかな痛みを覚えた。



「ちょっと、どういうことなのっ！ 騙されたーっ！」

目的地に到着した直後、美紅の絶叫が寝室内にこだまする。

目の前には薔薇の花びらが散ったキングサイズのベッド。花びらはハートを形作り、ハートの中にさらに花びらでLOVEと書いてある。どこからどう見てもハネムーン用のベッドだ。

「契約違反よっ！ セックスはなしって言ったのにつ！ この変態！ プレイボーイ！ スケベ男！」

「待って待って。まあ落ち着け。落ち着けて！ 寝室はちゃんと二つある。リビングに戻って北側のドアを開けてみる」

美紅は弾丸のように走って行って広いリビングを通り抜け、青い扉を開けた。見ると、確かに一回り小さめのクイーンサイズのベッドがある。

「納得していただけたかい？ マイハニー」

青い扉に寄り掛かり、片眉を吊り上げ皮肉たつぷりにディーターが言う。

「仮に同じベッドで寝ても、僕が君みたいなガキを襲う可能性は皆無だから安心しろ」

「それもそうね、スイートダーリン。あなたって繁殖期の種牡馬レベルの男性だから、ついつい疑ってかかってしまったの。ごめんさいね」

「ここらこちら。生々しいたとえを口にするな」

ディーターは疲れたようにため息を吐いた。

アテネで給油してさらに一時間半のフライトでキプロス島へ。そこからさらに専用ボートで約一時間。半日以上かけて二人はディーターが所有するプライベートアイランドに到着した。

島は想像以上に広く、ゴージャスなヴィラや巨大ホールが立ち並び、さらには教会まであった。建物はすべて現地で調達できる土や日干し煉瓦を使い、石灰を混ぜた漆喰で真っ白に覆われている。円形の屋根は鮮やかなターコイズブルーに塗られ、白とブルーのコントラストが目眩しい。まさにサントリーニ島に代表されるような、エーゲ海の絶景リゾートである。

二人のヴィラは島の一番奥にあった。ヴィラに入ってまず驚くのは真っ白な広いロビーだ。ガラスを効果的に使い、向こうに広がるエーゲ海のブルーをインテリアに取り入れている。大きなガラスに、小さなガラス、海を映したその神秘的なモザイクに美紅のテンションは一気に上がった。リビングは二十畳以上あり、ダイニング、キッチン、バスルームはもちろんのことプールや書斎まである。そしてベッドルームに足を踏み入れた瞬間、またしてもキングサイズのベッドが目に入り、美紅は猛烈に抗議したのだった。

立ち読みサンプル はここまで